【史料紹介】

唐文治「記庚子遇匪遇盗事」

——清朝官僚が記録した義和団事件当時の北京

湯城吉信

本稿では、唐文治著「記庚子遇匪遇盗事」（庚子、匪に遇ひ盗に遇ふ事を記す）（一九二四年作。『茹経堂文集』一編巻六所収）を紹介したい。

唐文治（一八六五～一九五四）は、清朝の役人を務め、後、教育に従事した（初代上海交通大学学長）。義和団事件の一九〇〇年当時、唐文治は三十五歳で、総理各国事務衙門に務め、外国との媾和に携わった。本稿で紹介する「記庚子遇匪遇盗事」は彼が実際に遭遇した義和団・匪賊の様子を如実に記録しており、当時の状況を窺う上で貴重な史料である。

唐文治は自著の年譜を残している（『茹経堂文集』五・六編、自訂年譜所収「茹経先生自訂年譜」）[1]。その中に、本稿で紹介する「記庚子遇匪遇盗事」に関する記述が見えるが、内容に若干の異同がある。本稿では些末な違いは一々指摘しなかったが、追加情報や内容に異同がある場合は注において紹介した。

唐文治は、江蘇省太倉の出身。義和団事件の際、大使館の集中する東交民巷近くの新開路に住んでおり、戦闘の様子を目の当たりにした。故郷に避難しようと思ったが、水、陸両路ともに閉ざされており行けなかった[2]。その時、世伯先という満州人の同僚が北京の北郊の村へ避難させてくれた。

唐文治は役人としては文書作成係を務めた。「記庚子遇匪遇盗事」中で北京に帰っているのも、全権の慶親王

奕劻を助け議定書を作成するためであった。この二年後の一九〇二年、唐文治は奕劻の息子の載振に随って英国訪問もした（日本も訪問している）。その訪問を記録した『英軺日記』は載振著となっているが、実際には唐文治が書いたとされる。[3]

以下、「記庚子遇匪遇盗事」のテキスト情報、原文（繁体字、中国の標点符号を採用）、現代日本語訳、注を挙げる。

注

（1）『唐文治自述』（安徽文芸出版社〈二十世紀名人自述系列〉、二〇一三年）所収の『茹経先生自訂年譜正続編』も『茹経堂文集』所収の年譜と基本的に同じだが、「拳匪」を「義和団」に変えるなど改変がある。中国における義和団の教科書的評価が「農民を主体とした反帝国主義の愛国運動」であることに基づく意図的改変であろう。中国の公刊史料にはこのような改変もあるので注意が必要である。（他、「邪教」という文字を抜く（三十頁）など。文言の抜けなども若干ある。）

（2）一九二六年作「満州二友伝」（『茹経堂文集』二編巻六所収）による。

（3）『英軺日記両種』（鳳凰出版社（中国近現代稀見史料叢刊〔第四種〕）、二〇一七年）参照。

【テキスト】

唐文治『茹経堂文集』一編（近代中国史料叢刊続編第四輯31、文海出版社、一九七四年刊。）＊巻六「雑記類」に「記庚子遇匪遇盗事」あり。

＊『茹経堂文集』は、『民国叢書』（上海書店、一九九六年）にも収録されている（第五編94-95綜合類）。ただし、年譜はない。

【原文】

記庚子遇匪遇盗事　甲子（唐文治『茹經堂文集』一編巻六）

光緒庚子夏，義和團圍攻使署，聲言譯署（即總理各國事務衙門）通洋人，將來燔燒。蓋因譯署庫儲款數千金，意欲劫掠之也。譯署總辦舒文等不得已，稟莊王請總壇拳

匪來守護，冀保全之。迺稟發，數日不得報。六月某日，余由戶部赴署，無一人，飯畢即離署。甫出衚口（京城謂之胡同。蓋衚字切音。）見大隊義和團揚旗執刀叉衝車來。一蘇拉（滿語謂僕役也。）追而呼曰：「總壇大師兄至矣。請速回接待。」余不得已折而回，迎於署內西廳事。大師兄者即匪首，裹紅巾，繫黃帶，自稱宗室。氣焰張甚，謂余曰：「貴署請我久，何無堂官迎我。且司官僅若一人，何慢我耶？」余曰：「本署人多兼差事，須未申始集。即如我，適從戶部中來。頃已通知堂官，不久即至。幸相諒。」匪首曰：「我見貴署同文館，妖氛甚熾，當即嚴締。有讀洋書妖人，即當殺卻！」余曰：「本署奉　文宗顯皇帝特旨設立，與東西各國相交涉。不得不讀洋書、通洋文。若欲殺人，當請命於　皇上。非我所敢應。」匪首見余倔強曰：「若豈真好人耶？吾當爲若焚表，儻表不上升，即係妖人，當殺卻。」余曰：「可。」匪首即設壇然香燭，口中喃喃，立焚表，飛灰上騰，揮手曰：「若真好人，可即去。」余至文案處，飛稟堂官許竹篔先生，請其速來。忽蘇拉倉皇來告曰：「團匪將殺廚司，乞往救。」詢其故，則曰：「壇眾均茹素，今菜中夾一片肉。疑破其法，故欲殺之。」余急趨往，則眾匪持刀環繞廚司，余某叩頭無數。余謂眾匪曰：「此事出於無心。君輩來保護本署，豈能任意殺人？」眾匪曰：「不然。君知我壇中規矩耶？」余曰：「若是，往見大師兄取決可耳。」遂群牽余某見匪首。余曰：「此事毋庸多辯。請焚表以明余某心。」蓋維時天氣燥烈，余逆知灰燼必上升無疑也。匪首曰：「可。」焚表，表上升。余某感激涕泣叩頭去。余出，又適時，許先生竹篔至曰：「今日，幸子在署。否則殆矣。」余又隨許先生往見匪首，略與周旋即出。適同事文君瑞字雲卿者來署，余乃以餘事委託之，歸白　堂上以爲笑談。

其後乃有遇盜之事。七月，洋兵至京城，團匪敗，虎神營軍散四出殺掠。余時奉　親避難於京北之七十里平義分村。蓋昌平、順義交界地也。居停主人張夢九恐匪至，堵塞其門。其鄰張在田者文庠生也。匪持刀入其家，在田恐驚，余伴之來。余略與拱手，匪曰：「毋恐。我來覓馬耳。」在田即導之馬廐，見槽間無馬，旋去。

八月十二日，余料京城平靜，將與洋人議和。譜兄世君伯先居平義分村之南二十里曰高麗營。余欲往與偕赴京城，而高麗營北五里之某村有劇盜踞焉，必經其地。趙芳

者武庠生，頗與余善。余與商偕行，趙力阻。余激之曰：「我文人尚無所畏。若武生，迺恇怯如此耶？」趙不得已，覓蹇驢一。

十三日，同往。隨行者尚有僕役李升，共三人。行十餘里，近盜窟。趙微語曰：「來矣！來矣！」果見盜三人，皆騎怒馬，負快鎗，迎面來。其爲首者，與余摩肩過曰：「君往京城耶？」余應曰：「然。」旋聞盜伴相語曰：「若識此君耶？」爲首者曰：「此城中唐先生，如之何不識？」迨抵高麗營告伯先大笑樂謂：「此輩亦識君，可謂英雄矣！」余亦笑然，莫明其故也。

九月，余奉　親返京城。先至高麗營，商諸伯先，雇保標（マヤ）者七八人，甫啓行。一人騎馬而前，曰：「唐先生憔悴，乃爾公事辛苦耶？」余視之即昔日所遇之盜也。急命李升詢之，其人姓楊名七。余居高麗營市物時，曾與禮貌閒談故告。李升甚感。

余車行十餘里，地曰泗兒上有大盜曰單刀李五，候余於門。楊七引余入李室，密告曰：「李君決不驚先生眷屬。惟先生箱櫝四，必有寶物。（避難不可携帶箱件，此爲前車之鑒。）李君請留以爲贈，可乎？」余曰：「可。但余係寒儉士，箱内皆敝書舊衣耳。李君不信，請啓視。」乃命輿夫負箱下車逐一監視，果無貴重物。李大失望曰：「先生行矣。」

又行二十里，地曰雷家橋，楊七告余曰：「過此爲洋兵界内，吾輩不能復送先生矣。」迺別去。

余驅車行，入安定門，見日本兵甚眾，略不顧問，乃暫居伯先家。逾月，聞楊七因劫掠已爲人鎗斃。余悵然累日。嗟乎！盜亦有道如楊七者，亦近今難得之人哉？孔子曰：「苟子之不欲，雖賞之，不竊。」曾子曰：「上失其道，民散久矣。」嗟乎！如楊七者，又孰致之死哉？

【現代日本語訳】

光緒庚子（一九〇〇年）の夏、義和団が各国の大使館を包囲攻撃し、総理各国事務衙門[1]は外国人に通じているので焼き討ちにすると言いふらした。おそらく、総理各国事務衙門に保管されていた数千金の資金を奪おうと思っていたのであろう。[2]総理各国事務衙門総弁（総裁）の舒文等はやむを得ず、荘王に命じて義和団首領に護衛を要請し、[3]事態の保全を図った。かくして命が下された

が、数日は返事がなかった。六月になり、私は戸部から総理各国事務衙門に赴いたが、誰もいなかったので、食事を終えて、衙門を離れようとした。路地を出ると、義和団の大隊が旗を掲げ刀や槍を持って車を走らせてやってくるのが見えた。一人の下僕が追いかけてきて、「首領の大師兄が来られました。戻って接待をお願いします。」と言った。私は仕方なく折り返し戻り、役所内の西のホールで出迎えた。大師兄とは義和団の首領のことで、赤い頭巾をかぶり、黄色い帯をつけており、宗室と自称していた。[4]ものすごい剣幕で、私に、「ずいぶん前にあなたの役所が私に要請してきたのに、どうして長官を遣わして出迎えに来ないのか。それに役人（主事）が一人しかいないとは、私を馬鹿にしているのか。」と言った。私は、「本署の役人はほとんどが兼務[5]で未申の刻（午後）になってから集まるのです。私はたまたま戸部から来ただけです。長官にはすでに通知しましたので、間もなく参ります。どうかお許しください。」と言った。首領は、「貴署の同文館は妖気が漂っているのですぐに粛清が必要だ。洋書を読む輩は即刻殺せ。」と言った。私は、「本署は咸豊帝の勅命で設立され、東西の各国と交渉にあたっています。洋書を読み洋書に通ぜざるを得ないのです。もし、人を殺すとおっしゃるなら、皇帝に命を仰いでください。私ごときができることではありません。」と言った。首領は私の意志が固いのを見て、「お前が本当に良い人間か、わしがお前のためにお札を焼いてやろう。もしそれが上に上らなければ妖人だ。即刻殺す。」と言う。私も「いいでしょう」と応じた。首領は、すぐに祭壇を作り、香を焚き、ぶつぶつと呪文を唱え、お札を燃やすと、灰が空に舞い上がった。[6]手を振って「お前は良い人間だ。行ってよい。」と言った。私は文案処に行って、急いで許竹篔長官に報告し、すぐに来るように要請した。すると、一人の下僕が慌てふためいてやって来て、「団匪がコックを殺そうとしています。すぐに来てください」と言った。理由を聞くと、「団員はみな生臭を避けているのに、料理の中に肉が一片入っていたのです。術を破ろうとしていると疑い、殺そうとしているのです。」と言う。私が急いで行くと、団員たちは刀を持ってコックを取り囲んで、余某

はしきりに土下座している。私は、団員に「これは知らずにやっただけです。あなた方は本署を守るために来てくださったのに、むやみに人殺ししてよいのですか。」と言うと、団員らは、「違う。我々の規則を知っているか（規則でそうなっているのだ）。」と言った。「それなら大師兄様にお会いして決めてもらえばよいでしょう。」と言うと、彼らは余某を首領のところに連れて行った。私は、「あれこれ言わずに、お札を焼いて余某の心を明らかにしてください。」と言った。当時はちょうど晴れて暑く乾燥し、私は灰が必ず上ると確信していた。首領は「よし。」と言い、お札を焼くと案の定上昇した。余某は感激して泣いて土下座し去って行った。私は出て、しばらくすると、許竹篔長官が来て、「今日は幸い君が署にいてくれて助かった。そうでなければどうなったことか。」と言った。私も許長官に従って首領に会いに行き、若干交渉を行ってその場を離れた。たまたま同僚の文瑞君（字は雲卿）[7]が署に来たので、私は彼に余事を託して、以上のことを親に話して笑い話の種とした。

その後、盗賊に遭ったこともある。七月に、外国人の兵隊が北京に侵攻し、団匪が破れ、虎神営軍（北京の近衛軍）が四方に散らばり殺戮を行った。私はこの時、親を伴って北京の北七十里の平義分村に避難した。[8]昌平と順義の境の土地である。居留先の主人張夢九は匪賊が来るのを恐れて、その門を閉ざした。その隣家の張在田は文科の学生であった。[9]匪賊は刀を持ってその家に入り、在田は慌てふためいているので、私が相手をすることになった。私が拱手すると、匪賊は「恐がるな。私は馬を探しに来ただけだ。」と言う。在田が厩に連れて行き、そこに馬がないのを見ると、そのまま去って行った。

八月十二日、北京が落ち着き、外国人と和議を結ぶであろうと推察された。親戚の世伯先は平義分村南に十里の高麗営という所にいた。私はいっしょに北京に行こうと思った。[10]ただ、高麗営北五里にある某村は凶悪な盗賊のアジトになっているが必ず通らずにはいられない場所であった。趙芳は武科の学生であり、私と親交があった。私はいっしょに行こうと相談したが、趙は行きたくないと言う。私は怒って、「文人の私が怖がっていないのに、武人[11]のあなたが怖がっているとは何事か。」と

言った。趙はやむを得ず、驢馬一匹を探してきた。[12]

十三日、いっしょに出発した。同行者は他に下僕の李升がおり、全員で三人であった。十里余りを進み、盗賊のアジトの近くに来た。趙が小声で「来た、来た。」と言う。見ると果たして盗賊三人が、荒馬に跨り、鋭い槍を背負って、正面からやってきた。その頭の者は私のすぐそばを通り過ぎてから、「北京に行かれるのか。」と言う。私が「そうです。」と答えると、盗賊たちが「この方を知っているか。」と言い、頭の者が「これは北京の唐先生だ。知らないはずがない。」と言っているのが聞こえた。高麗営に着いて伯先に告げると、「君のことを知っているとは、英雄じゃないか。」と大笑いされた。私も笑ったが、どうしてなのか理由はわからなかった。

九月、[13]私は親を連れて北京に戻った。まず、高麗営に行って、伯先と相談し、用心棒を七八人雇ってから出発した。一人が馬に乗って先導したが、「唐先生は憔悴されましたね。宮仕えが大変なのですか。」と言う。見ると、先日遇った盗賊である。急いで李升に尋ねさせると、姓は楊、名は七という。私が高麗営で買物をしている時、丁寧に応対してやったことがあったという。[14]李升は感慨深い様子であった。

私は車に乗って十里余り行き、泗児で単刀の李五という泥棒が私を門のところで待ち構えていた。楊七は私を引いて李の部屋に入ると、「李兄は決して先生の家族を脅かしません。ただ、先生は行李を四つもお持ちで、お宝もありましょう。（避難の際には荷物を持つべきでないことは後世の諫めとしてほしい。）李兄は贈り物がほしいと言っているのです。可能ですか。」とこっそりと告げた。私は、「いいですよ。ただし、私は貧乏書生なので、行李の中は古書と古着しかありません。信じてもらえなければ開けてみてください。」と言った。そこで、駕籠かきに行李を下ろして一つずつ開けさせると、果たして貴重な品はなかった。李はたいへん失望して、「行っても結構ですよ。」と言った。

私は車を駆って進み、安定門に入ると、日本兵がたくさんいたが、尋問を受けることもなく、[15]ひとまず伯先の家に泊まった。翌月、楊七が強盗を働いた際、人に撃ち殺されたと聞いた。私は何日も気が晴れなかった。あ

あ、盗賊で楊七のように人の道を知った者は、今の世の中では得難い人物ではないか。孔子は「もしあなたが貪欲でなければ、〔民衆は〕賞を与えても盗みを働かないでしょう。」（＊『論語』顔淵篇）と言い、曾子は「上が道を失い人心がばらばらになってずいぶん経つ。」（＊『論語』子張篇）と言った。ああ、楊七を死に追いやったのはいったい誰なのであろうか。

【注】 ＊以下、「年譜」は「茹経先生自訂年譜」のこと。

（1）総理各国事務衙門　現東城区の東堂子胡同（現外交部街の北に東西に延びる路地）にあった。東と西に分かれ、東が京師同文館、西が外交を司る部分であった。

（2）『那桐日記』上　五月廿六日に「…今早理藩院銀庫被亂兵所劫。」とあるのを参照。

（3）義和団を清朝朝廷が承認したこと　岡本隆司『袁世凱―現代中国の出発』一〇〇頁に、山東巡撫の毓賢が義和拳を「団練」（当局が治安維持のために認可した武装集団）と認定したこと、一〇七頁に、西太后の側近であった満州人の剛毅が「義兵」と認定したことが見える。

（4）大師兄　年譜によると、満州人だった。

（5）総理衙門の役人は兼務であったこと　岡本隆司『李鴻章―東アジアの近代』八四頁に「総理衙門も一国の外交を専門的・一元的に統轄する近代国家の外務省ではなかった。その構成人員は一時的に兼務しただけで、別に本務の官職を有しており、官庁じたいがあくまで臨時という位置づけである。」と見える。大臣も軍機大臣が兼務した。

（6）義和団が札を焼いて罪を決めたこと　栄禄『景善日記』（『庚子拳変日記』）によると、焼くと昇る薄い札と降る厚い札を用意していたという。同日記は義和団事件後に栄禄の立場を有利にするために捏造された偽作だとされている（菅野正『清末日中関係史の研究』参照）。ただ、義和団事件当時の清宮の様子が生き生きと描写されているので参考までに挙げておく（原文は英文で中国語はその転訳）。

義和團判斷人罪之法，亦至奇異。對其人燒黃表，視其灰之升降。灰上升則免死，下降則立殺之。其實灰有薄有厚，薄者易升，厚者常降。亦視其纏之鬆緊，鬆者易升，緊者常降也。其放火亦言有神指導。用刀或槍，向房屋門上指畫，又向地上土上指畫，群呼曰「着！」，立時火燃，實則皆暗中布置者也。（景善『庚子拳変日記』（由洋文転訳）（『民国叢書』第五編66所収『中国近百

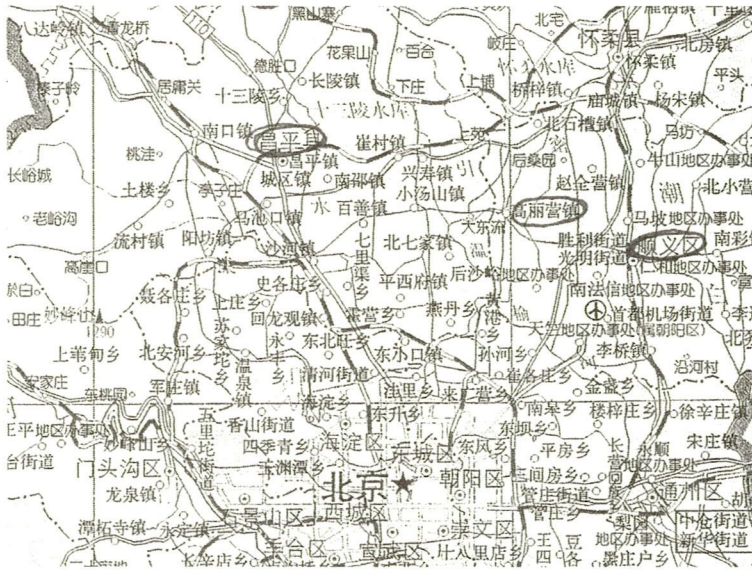

図1　北京市北郊地図（1999年のもの）（『中華人民共和国政区標準地名図集』p.22）

年史資料続編』四七八頁）

（7）文瑞　年譜によると、満州人で義和団を信奉していた。

（8）平義分村への避難　満州人の同僚、世伯先（馬佳世善？）が世話してくれた。ただ、その伯先自身強盗に遭っている（「満州二友伝」参照）。年譜によると、北京の北直門を出て十里余で雷家橋、さらに三十里で高麗営（市場）。さらに二十里で平義分村があるという。

昌平、順義とも現北京市内にあり、市中心から見て、昌平県は北西に、順義区はその東に隣接する北東部にある（もともとの首都空港の所在地）。高麗営も見える（図1参照）。

（9）張在田　年譜によると、大家の兄であった。

（10）北京へ戻ること　年譜によると、奕劻を助けて議定書を作るためであった。

（11）武庠生　一八八五年、李鴻章が創設した西洋式の軍学校である北洋武備学堂あたりの学生か？（岡本隆司『袁世凱―現代中国の出発』六七頁参照）

（12）驢馬を探してきたこと　年譜によると、車はやめておいた方がよいということで驢馬にした（「（趙）曰：『車輛決不敢借，騎驢可乎？』余曰：『可。』」）。

（13）九月　年譜では十月。

（14）楊七への応対　年譜では、伯先の開く万屋（什物肆）に

楊七が買物に来た時に丁寧に応対したことがあった（「（余）常在伯兄所開什物肆中閒坐。楊七來購物，余亦加以禮貌，渠因而感余。」）。

(15) 北京への入城　年譜によると入れなかった？（「至雷家橋南，歩行至北直門，爲日本兵所阻，不得進。爰繞道進朝陽門。」（雷家橋から北直門に行ったが、日本兵に阻止されて入れず、遠回りして朝陽門から入った））

…年譜との齟齬は、後日書かれたものであるため唐文治の記憶もあやふやだったことによるのかもしれない。

参考文献

唐文治『茹経堂文集』二編（近代中国史料叢刊続編第四輯32、文海出版社、一九七四年刊。）＊巻六「伝類」に「満州二友伝」あり。

唐文治『茹経堂文集』五・六編、自訂年譜（近代中国史料叢刊続編第四輯34、文海出版社、一九七四年刊。）＊「茹経先生自訂年譜」を所収。

『民国叢書』（上海書店、一九九六年）（第五編94－95綜合類）

＊『茹経堂文集』を所収。

『民国叢書』第五編66所収『中国近百年史資料続編』＊景善『庚子拳変日記』を所収。

岡本隆司『袁世凱―現代中国の出発』（岩波新書、二〇一五年）

岡本隆司『李鴻章―東アジアの近代』（岩波新書、二〇一一年）

菅野正『清末日中関係史の研究』（汲古書院、二〇〇二年）

中華人民共和国民政部・中国人民解放軍総参謀部測絵局『中華人民共和国政区標準地名図集』（星球地図出版社、一九九九年）